

研究通信

No. 74

1970年12月刊
村落社会研究会
事務局

成蹊大学法学部
社会学研究室内

第一八回大会に参加して

牧野由朗

第一八回村研大会はさる一〇月二八、二九の両日、山形県天童市で多數の参加者を得て盛会裡におこなわれました。大会の印象を牧野会員に記していただきました。

いつでもそうであるが、東北での大会にむかうときは、まるさとへ里帰りするような気になるから不思議である。おそらく、会員諸氏も多かれ少なかれ、そんな気持ちで開催地の天童市へ向ったのではないか。わたくしも同行した川越、後藤会員らと「村研」一八年の歩みや、われわれの研究を上廻るスピードで變化する最近の農村の話題や、それへの今後の対応のしかたなどを語りながら、車窓に流れる板谷峠の美しい紅葉を眺めて、東北へきたという実感を抱いたのである。

さて、今回の大会に参加して、二三、わたくしの印象めいたことを書きとめておきたい。それには、まず、共通課題として長年頑張であった「村落社会研究の方法」を真正面からとりあげたこ

とを第一にあげなければならない。いうまでもなく、「村研」は村落を対象にしたインター・ディシ・プリンの研究会であるから、この課題は、ある意味で宿命的なものであるともいえよう。もちろん、それはとりあげたとしても簡単に解決できる問題ではないが。しかし、基礎過程としての日本農業の構造的変化に運動されてもラの解体が云々されている昨今、いま一度、原点にかえってムラを正しく把握するために、従来からの豊富な実証的データによりながら、村落研究の方法を再検討することは、会員の誰もが望むところであり、時期を得て試みであったことができる。

つぎに、今回の大会は、社会学大会の日程とり離して行なったはじめの単独の大会であつたが、それでもかかわらず多数の会員の参加が得られたことにも大きな意義を認めなければならぬ。それだけに、大会開催の労をとられた竹内会員はじめ坂本、勝又、岩本会員および東北大、山形大学の大学院生の方々の御苦労に衷心より謝意を表さなければならない。「村研」も一八年の年月を経て名実ともに成人の域に達したといえようか。

このような条件のもとで、大会を成功裡に終らしめたいまひとつ大きな原因是、過去一年間に、在京委員を中心にして行なわれた教団にわたる研究会と、それを「研究通信」にまとめてくださった事務局のお骨折りにあつたことも忘れてはならない。課題そのものが大きすぎて、ややもすれば論点がかみ合わない危険性をもつてはいたが、「研究通信」は、研究会に出席していく地方会員のために、その問題の所在と、大会に参加する会員の心構えに充分なオリエンテーションを与えてくれた。紙面をかりて研究会の報告者（園田、安原、源武、細谷会員）、とりわけそれをま

とめてくださった事務局の意見委員およびその関係者に厚く御礼を申しあげたい。

ところで、大会はプログラム通り第一日目は自由報告五題とそれに関する総括討議が、第二日目は共通課題に関する報告と共同討議が行なわれた。

自由報告の二題（堀口、岩本）は、経済史学による近世の村落に関するもので、ここでは、早くも家、家連合、共同体に論議が集中した。岩本会員の「家を共同体として考える」、「観念としての家」の見解に対して社会学側からの質疑がなされた。「共同体の検討は過去一八年間の課題であり、異なる意見をぶつけ合う場」（中村）としての「村研」の面目を示したひとまである。あとの三題はいずれも社会学からの報告で、そのうち、林、民秋両会員は、現代の農村社会をとりあげ、その急激な都市化過程の渦のなかで変容する村落の解明を試みていたが、旧いものと新しいものが複雑に錯綜する現代の村落を、どのような視角から、どんな方法で分析すべきであるか、二日目の課題の必要性を痛感せしめるものであった。「大蔵經を棚上げ」（通信六〇号）にしての内藤会員の報告は、昨年にひきつづいて五島カトリック家族分封についてなされた「家なき家族の不定相続」の分析で「村研」としては異色なものであったが、先生の蘊蓄された学識から生まれる巧まさの機智が、その報告に一層の光沢をそえていた。

第一日目の共通課題の報告は、それぞれが異なる視角から、安孫子、高橋、田原会員によってなされた。本来「研究方法」はピックワードであるが、大会では、いすれもそれが単なる調査の方法としてはなく、もと大きな「村落研究のための理論的枠

組、アプローチの方法ないし視角」（福武）としてとりあげられた。そのため、ことに共通課題として第一回目ということもあって、討議の糸口をつかむにも、あるいは討議の枠組を構成するに多少のむつかしさはあったが、午後の共同討議は、島崎会員から各報告者に「現段階をどうとらえるか」、「支配構造からの村落へのアプローチのしかた」、「生活の論理の具体的説明」についての三点の質問によって始められた。報告および討議については年報第七集に記載される予定であるから、その詳細については省略するが、わたくしの印象に残った点だけを記載してみたい。

討議は、日本資本主義の農工間の不均衡発展、それに関連する農民窮乏化の問題、土地所有に関する共同体の本質、さらには家とムラおよび身分の問題、地域的家連合（生活共同の組織）と慣行、およびそれらへの支配権力のかかわり合い、国家独占資本と農民層分解にかかる諸問題など、きわめて多岐にわたり、やや散漫的なきらいがないでもなかつたが、村落研究に関する基本的な諸問題が総括的にとりあげられた。そのなかで最後の島田会員の発言にみられたように、「現段階を國家独占資本の段階と簡単に規定することは容易であるが、その場合、国家独占資本をどう解釈するか」が問題であり、あるいはまた、われわれが階級分化といい、農民層分解といった場合、その両者をどう区別するかなど、基本的なタームの明確な概念規定の問題の重要性を痛感せざるを得なかつた。また、それらが、「村研」の場において、單なる抽象的な議論に終ることなく、現在の農漁民の生活に具体的にどうかかわり合っているか、現状のムラとどう関係しているかなど、「原理と現状」（矢木）の不可分を結びつきによるキメの

細かい分析の重要性をわれわれに再認識せしめる討議でもあった。それはまた、司会者の「現在のムラがどうなっているか、それを分析するための柱は何であるか、それをスキームとした具体的な事例をぶつけあうこと期待したい」（福武）といううしめくくりの言葉にも通じるものであろう。

このようにして共同討議は、予定通り三時四十分に終了し、来年の再会を約して成人した第一八回大会は、多くの収穫を残して閉会したのである。あらためて、事務局、大会運営会員にあつく感謝の意を表して、わたくしの大会参加の感想を終りたい。記念にいただいた机上の「王将」をながめながら。